Osaka University Knowledge Archive

Title	現代日本女性の生き方意識に関する研究 -特に宗教的意識および倫理的価値意識の側面から-
Author(s)	山縣, 喜代
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3060100
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	山縣喜代（やまがた　き　よ）
博士の専攻分野の名称	博　　士　（人間科学）
学位記番号	第　10028　号
学位授与年月日	平成4年2月5日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科　教育学専攻
学位論文名	現代日本女性の生き方意識に関する研究 －特に宗教的意識および倫理的価値意識の側面から－
論文審査委員	（主査） 教　授　梶田　叡一 （副査） 教　授　森田　孝　　教　授　麻生　誠

論文内容の要旨

主題の位置づけ：

近年日本人の国際舞台での活躍が目覚ましくなるにつれ，日本人の考え方・行動の仕方の特異性が注目を集めるようになり，日本人の間でも“日本人性”ということが強く意識されるようになってきた。それに伴い日本人性をめぐっての考察や議論が頻繁に行われるようにもなってきている。しかしその考察の主なものは，文献研究や日常生活の観察をよりどころとしており，果たして現代の日本人の一般的特性を言いあてているものなのか疑問に思われる面もないわけではない。

そこで本研究では，実証研究により論議の共通の基盤をつくり，その上にたって考察を進めることにより，日本人の特性，特にその生き方意識にかかわる特性を把握していこうとするものである。より具体的には，日本人の生き方に関する意識に対し，宗教的意識と倫理的価値意識の側面から焦点をあて，さらには，研究が遅れがちな女性の意識や心情に視点を絞って研究を進めている。

調査・分析にあたっては，次に示すいくつかの点に留意すべく努めた。すなわち①日本人としてのメンタリティに即した研究であること，②学校教育のもつ影響力を吟味すること，③世代・ライフサイクルによる相違点・共通点を考慮することである。

①に関しては，日本人の心理を測定するのにもとかく欧米の調査票にたよりがちな一般の傾向から離れて，日本人である筆者が日本人としてのメンタリティで作成した質問紙を用いて調査し，日本人の目で分析・考察することである。それと同時に同じ質問紙を用いてヨーロッパにおいても調査を実施し，結果を比較検討することにより日本人性を明確に浮上させることである。②に関しては，日本において宗教教育を行っていない学校の高校生群と大学生群，キリスト教文化圏の高校生群と大学生

群，キリスト教文化圏の高校生群と大学生群の間に，日本においてかなり長期間宗教教育を受けているキリスト教校の高校生群と大学生群を配置し，連鎖的比較を試みることにより，教育のもつ影響力を吟味するということである。③に関しては，日本において１０歳代の高校生，２０歳代の大学生，３０～５０歳代の壮年者，６０～８０歳代の老年者を対象に調査を実施することにより，ライフサイクルや世代による相違点および共通点を把握しようとするものである。

調査方法：

本研究では質問紙法による調査を実施した。質問紙の作成にあたっては文献研究やフィールドワークそして議論を重ね，予備調査に付した。英文の質問紙に関しても，バックトランスレーション等の手続を実施し，可能な限り同じ尺度で測定できるよう留意したつもりである。

調査には1989年1月～12月までの1カ年をかけた。生徒・学生の場合は主に先生方による学校での実施となった。キリスト教大学の学生たちの場合は，２０歳以上で8年間以上キリスト教教育を受けている者と限定したので，該当者にダイレクトメールで依頼した。老年者群の場合も同様の方法をとった。壮年者のデータは，多くの方々の好意により種々の方法で回収した。

被調査者数は，一般校の高校生207名・大学生72名，キリスト教校の高校生125名・大学生116名，ヨーロッパの高校生49名・大学生43名，壮年者123名，老年者176名の，総計911名である。

本論文の構成：

本論文は，第Ⅰ部理論編，第Ⅱ部実証編，第Ⅲ部総括編の3部から構成されている。理論編ではまず調査分析にあたって前提となる諸概念，すなわち女性性の問題，宗教概念の問題，ライフサイクル・世代のとらえ方，真の教育が意味するものをめぐる考察を行い，続いて宗教的意識や心情の核となると思われる神の概念，死後の世界，信仰心について，そして倫理的価値意識に関しては，善悪の判断や罪意識の問題，判断行動の基準の問題，人生で大切であると思う価値や生きがい感について，通説となっている考え方や先行研究を中心に考察をめぐらしている。第Ⅱ部の実証編においては，上記の理論編の内容に対応するような形で分析結果と考察を述べている。第Ⅲ部の総括編では，ここまで便宜上テーマごとに分割されていた分析結果や考察を総合的にまとめなおし，浮上してきた結果を文化・教育の視点およびライフサイクル・世代の視点から吟味している。

結果と考察：

結果と考察の主なものは下記のとおりである。本研究の結果明確に浮上してきた点は，文化的，教育的影響力の大きさということである。それは宗教的意識に関しても，倫理的価値意識に関しても見られた。出てきた意識の特徴によりグループを大別すると，宗教教育を受けていない一般校の高校生・大学生同志，日本においてキリスト教教育を受けている高校生・大学生同志，そしてヨーロッパの高校生・大学生同志（以下，それぞれ一般校群，キリスト教校群，ヨーロッパ校群と呼ぶ）が，同じグループに属するという結果となった。壮年者群，老年者群の場合は宗教的意識に関してはキリスト

教校群に属し，倫理的価値意識に関しては一般校群に似通っているという結果となった。

ヨーロッパのキリスト教世界で生活している高校生・大学生の宗教的意識や倫理的価値意識が，日本でかなり長期間同じキリスト教教育を受けている同年齢の高校生・大学生と異なるということは，その文化的影響力の強さを示しているのであろうし，キリスト教教育を受けている高校生・大学生が同じ日本の似た地域に住み，同年齢である一般校の高校生・大学生の意識や心情と異なるということは，教育の影響力を示しているものと思われる。具体的に2，3の例をあげよう。教育により日本のキリスト教校群が，ヨーロッパ校群と同様の考えをもつようになっていると思われる点は，“信仰に対するはっきりとした肯定の姿勢”である。しかし，その信仰内容となるとヨーロッパ校群とは異なり，むしろ日本の他の群と程度の差こそあれ似てくる。例えばヨーロッパ校群は一般校群がその存在を漠然と認めていると思われる自然の延長線上にある八百万の神々の存在をはっきりと否定しているのに対して，キリスト教校群の意見は明確ではないこと，ヨーロッパ校群は死後の世界を神に出会い，大切な人々と再会し，永遠に生きる喜びに溢れた幸せなものと見ているのに対し，キリスト教校群は一般校群同様暗く寂しく恐ろしい世界ではないとしながらも，果たして幸せな世界であるのか定かではないことなど数多く上げられる。倫理的価値意識に関しては宗教的意識や心情ほどに明確ではないが，やはりキリスト教校群は一般校群とヨーロッパ校群の中間的位置を占めている。例えば，物事を判断し行動する際の基準を自分の考えにおくのか回りの考えや状況におくのか一般校群には迷いがあるが，キリスト教校群は前者を選択している。しかしヨーロッパ校群ほどに，事なかれ主義を否定しているわけではない等である。

上記の文化的・教育的影響力は，年齢の差を越えるほどに大きなものではあるが，それぞれのグループ内では年齢による傾向の違いも見られる。例えば，時系列的に調査した先行研究のなかに，日本人の信仰や信心をもつ比率は加齢により増加するという結果を報告しているものがあるが，本研究においても年齢の上昇に伴って，一般の日本人の信仰への肯定率が高まっているという結果を得た。また，日本人の特性といわれがちな人の目を気にする恥の気持や，罰・たたりへの恐れ等も同様に年齢の上昇に伴い高まる傾向がある。さらに，キリスト教校群内，ヨーロッパ校群内においても，宗教的面における成熟ともみられる年齢による差異が多く見られる。

一方，一般にキリスト教文化圏の人々の，あるいは日本人の，固有のものの見方や考え方と言われているものの中には再検討を要するものもあるという示唆も得た。例えば，キリスト教文化圏の人々は神を厳しく怖い父としてとらえていると言われているが，神の厳しさ怖さを最も強く否定しているのはヨーロッパ校群であった。また恥の意識や恩・義理・人情に関しても日本人固有の特性であるとは断言できない。人の目を意識した恥意識というよりは，自分の罪深さを恥たり，ある行為は恥ずべきものであると判断したりするような恥の意識や心情はヨーロッパ校群もはっきりと認めているところである。恩・義理・人情についても，日本人群はヨーロッパ校群に比べその意識や心情をより強くもち，その及ぶ範囲も広いという結果が出てはいるが，ヨーロッパ校群にも類似した意識や心情とそれにまつわる戸惑いが見られる。

さらに，洋の東西を問わず人間として共通であると思われる意識や心情も数多くある。人生の中で

大切なのは思いやりや愛であり，一人一人の人生には皆意味があることなどを支持する心情はその例である。

本研究の結果は日本人の生き方意識の極一小部分に過ぎないが，このような研究の積み重ねは，国際社会に生きる日本人が，互いに共有する人間性，互いに異なる国民性，教育や年齢により変わりうる種々の傾向を把握し，相互理解を深めていくうえで大切であろうと思っている。今後も国際理解の一助となることを願って，さらに研究を深めていきたいと思う。

論文審査の結果の要旨

本論文の主要部分は，現代日本女性の生き方に関わる意識について，実証的に検討したものである。このために質問紙調査票が，入念な予備調査の過程を経て作成され，①ヨーロッパ（アイルランド，英国）の高校生・大学生，②日本のキリスト教系学校に学ぶ高校生・大学生，③日本の一般学校に学ぶ高校生・大学生，④日本の壮年者・老年者，の各群に対して実施された。この結果，

(1) ①群と③群の間に宗教的・倫理的意識に関する顕著な差異が見られ，②群の意識のあり方はその中間に位置することから，この面での文化的規定性と同時に教育的規定性が実証され，

(2) ②群および③群の意識と④群のそれとの比較検討から年齢の高い層ほど宗教を肯定し，恥や罰・たたりへの恐れといった伝統的倫理意識が高まること，

等が実証された。

こうした研究成果と，それに関わる考察および理論的検討は独創的かつ高水準のものと認められ，当該領域における今後の諸研究の土台となるものとして高く評価できる。